

ゲスト：井上八重子さん（品川生活者ネット）＋吉田由美子さん（生活クラブ連合）

記念すべき第 1 回の公共福祉カフェは、私たちに身近な領域で市民参加の社会づくりに取り組んでいる方を、ということで、地域政党である品川・生活者ネットワーク所属の品川区議、井上八重子さん（<http://inoue.seikatsusha.me/>）をゲストスピーカーにお迎えして対話を行いました。併せて、いま日本の市民社会が一番世界から問われているエネルギーの問題も考えるため、市民による再生可能エネルギーづくりを、生活クラブ連合の吉田由美子さんに報告していただきました。

生活者ネット、風車カフェ、助け合いワーカーズ・たんぼぼ



生活クラブ東京の
井上八重子さん

井上八重子さんは、1980 年代の終わりに食の安全の問題に取り組むなかで、お任せ議員を選ぶのではなく自分たちが参加してつくる必要を感じて、2003 年から議員を務めるようになりました。「生活と政治をつなぐ」「回復役のプラットフォームになる」ことを目標に活動する生活者ネットでは、現在、都議会 3 人、区・市議会 52 人が議員として活躍。その“ルール 1”は、議員を職業化・特権化しないための「交代制（ローテーション）」。最長でも 3 期で他の人（特に新人）に交代することで、政治に参加する層を増やすとともに、議員を経験した人はまた地域に戻って市民として活動することになるといいます。こうしたかたちは、いま改めて市民と政治の関係のよいモデルを提供していると感じます。

井上さんたちは、現在の介護保険制度では、ケアプランがない限り、必要があってもケアワーカーが支援できない部分があるという、いわば制度に生き方を合わせている現状に対して、生き方に制度を合わせることを目指して、2006 年に「品川たすけあいワーカーズ・たんぼぼ」

（<http://genki365.net/gnks16/mypage/index.php?gid=G0000095>）の活動を始めました。そこでは雇用-被雇用の関係を排し、必要とされるサービスの提供に努めていますが、他方で、ワーカーの活動の持続性を支える報酬と利用者の負担増の間での試行錯誤があることもお話しくさしました。また、2016 年に差別解消法が施行されるのに向けて、区の条例制定をめざしての勉強会「風車カフェ」（2014 年 7 月から）の活動も紹介され、今後も、マイノリティや弱い立場の人の代弁者となること、市民の現場の必要を拾い上げて事業化を支援していく活動をして行きたいと語られました。

組合員が再生エネルギーを選ぶ仕組みづくりへ

吉田由美子さんが昨年まで理事長を務めていた生活クラブ東京は、会員数 7 万人と小規模ながら、運動性の高さは自他共に認める存在。やはり「安全な食」への取り組みから始まった活動では“自分たちの暮らしを自治すること”、そのために“その時一番課題になっていることを自分たちで解決すること”を基本スタンスにしてきたといえます。そのなかで、環境、福祉、政治参加、そして近年ではエネルギーの自治に取り組んでいます。生活クラブとしての再生可能エネルギーへの取り組みとしては、10 年以上前、生活クラブ北海道が、浜岡原発に反対の立場から対案としての意味を含めた風車を 1 基設置していましたが、生活クラブ東京でも、東日本大震災の発生以前に、秋田県にかほ市での風力発電（グリーンファンド秋田）の計画を進めていました。その設置直前に大震災が起これば、吉田さんたちは「間に合わなかった」という思いと同時に、「この計画は進めなければ」と感じて、設置に取り組んだといえます。



生活クラブ東京の吉田由美子さん

そして同じ頃、全国の生活クラブ生協の事業連合である生活クラブ連合会でも再生可能エネルギーへの取り組みが始まり、各地に発電施設の建設が行われてきました（昨年度までに太陽光 23 箇所、風力 1 箇所が設置され、2014 年度は太陽光 2 箇所、風力 1 箇所を予定）。現在はまだ高圧契約の事業所への売電しかできないため、生み出した電力を PPS（特定規模小売業者）に売り、そこから生活クラブの事業者（事業所の電力）に売るという仕組みをとっています。今後は、生産者の畑、工場の屋根、豚の尿尿のバイオマス発電、生産者のもつ水利権を利用した小水力等を組み合わせて発電を行いながら、全国の生活クラブ事業連合によりエネルギー会社「生活クラブ エナジー（仮称）」を立ち上げ、2016 年に電力小売が全面自由化された際には、組合員の家庭に売電する構想をもっています。

生活者として政治に参加することを阻むもの

参加者との対話では、まずカフェの運営メンバー代表の稲垣さんから皮切りの質問として、「戦後の日本社会は男性がすべてのエネルギーを仕事に吸い取られるいびつな社会であった。そのなかで男性のもつ名誉・権力志向のようなものもあって、それが既得権益と結びついて政治世界で男が上位のポストを独占していく構造がある。北欧のクォーター制のように議会の何分の一かを女性にすることを法的に義務づける手段もあるが、それを法制化するパワーも生まれてこず、女性が生活者として政治に参画することに大きな壁がある。改めて、なにが政治や政策決定への女性の参画を阻んでいると思うか？」という問いが出されました。それに対する井上さんの答えは、以下のように情報公開と政治の壁の関係



を紹介して、大変示唆に富むものでした。「既成政党と生活者ネットとでは情報公開の点で大きな開きがある。品川区議会の 場合、委員会で審議される資料が議員に回ってくるのは開催当日の 2 日前。それも 『議会で成立するまで、市民に公開してはいけない』とされている。私たちは市民 の意見を反映した政策を実現する政党なので、それを公開して意見を聞くが、時間 が短すぎる。多くの議員は、選挙で自分たちに託されたのだから、白紙委任をされていると勘違いしているので、自分たちが情報を持ち、決まったことだけを知らせ ればよいという感覚をもっている。大会派が情報を握っていて権力をもっているという体質は感じている」。参加者との対話では、やはり投票率を上げる努力が必要との意見や、市民が自分たちで参加して課題を担うことが重要との指摘が多く出され、台湾出身の参加者からも、周囲の様子をうかがって自己主張を控える日本社会であっても自分の意見を言うことが物事をよい方向に変える経験をしてきたと話されました。そのなかで別の 参加者からは、神奈川県逗子市で、市民と行政をつなぐファシリテーターが市の制度として設けられ、地域の課題解決に大きな成果をあげていることも紹介されました。次回 12 月 6 日は、今回の吉田さんの報告を受けて、市民による再生エネルギー創出についてももう少し詳しく知り、考えるとともに、今日的な地域コミュニティの再生について、お二人のゲストに報告していただき、対話を深めたいと思います。

